

梶山女学園大学

## 情報の概念について (2)

著者	小和田 正
雑誌名	梶山女学園大学研究論集 人文科学篇
号	33
ページ	145-151
発行年	2002
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1454/00001394/">http://id.nii.ac.jp/1454/00001394/</a>

## 情報の概念について (2)

小 和 田 正

### The Concept of Information (2)

Masashi KOWADA

#### 第2章 情報の定義

##### 2.1 認識と情報

前節で述べたように、認識する行為は気遣いに基づくものであり、認識者が意識的であろうと無意識的であろうと、原直感の志向性により、認識には意味が内在する。認識者が知覚空間に生じた知覚の意味に基づいて意識空間の中に言語やイメージが作り出されたとき、はじめて認識者に情報の発露がなされる。情報を他者に向けて発信する行為は、情報の発露とは別の事柄である。あえて云えば、情報の発露は認識者が己に向けて発信する行為である。情報の発信者は人間であるとは限らない。何か物理的実体または現象を観察して、それを知覚した者の認識空間に概念が形成され、それをこれこれであると認識したとき、その物理的実体または現象が発信者であり、観察者が得た認識が観察した物理現象から発信された情報であるとみなされることもある。月の観測結果から月の表面に関する情報をとるといふ言い方はこのような例である。

しかしこのような説明では情報と認識の行為、すなわち、意識空間における認識と殆ど区別が付かない。原直感の志向性には意味が伴うが、この「意味」は外部から伝達されたものであるという訳ではない。原直感には外部の存在が先行することはないからである。情報は、したがって、月を見ている時の原直感に内在する意味ではなく、認識空間の中で概念構成する際に、その起源を説明するために、それが浮遊する空間を設定して、概念が生まれてきた道筋を付け、その道筋と概念の自然言語的な意味を併せ持つものとして捉えられたとき、初めて情報化されるものである。したがって認識空間に生じた意味内容そのものと情報とは区別されなければならない。このようにして生成される概念は、それが伝搬してくる空間や発生地点（他者）、および、概念の意味の自然言語化がなされ、その主体としての自己の存在をともなっている。これは通常自然科学のカテゴリー設定に他ならない。この意味で情報は哲学用語ではなく、自然言語として位置づけるのが自然であろう。月を見て認識された知識を、それが月から自然科学的世界の中を「伝搬されたもの」として再認識する時、初めて情報の名前にふさわしいのである。

ここで、単なる認識と違って、意味内容の他に新しく出現している概念は空間や他者や

自己の存在である。ここで表現を簡潔にするために「伝搬」という用語を用いよう。認識空間において意味内容が概念化されることによって、空間概念や他の科学的な概念と結合可能になり、物理的実体のように伝搬が考えられることから、情報を「伝搬」される媒体の自然言語的意味内容として捉えようと云うのである。こうすることによって、生じた概念の意味そのもののみと情報とは区別される。月から光による映像が伝搬されて、それが観測者によって認識されたという捉え方である。すなわち観測しているとき、月自体を見ているのではなくて、月として認識したものから到達した映像を認識しているという見方である。「月自体」を視ることと、「月として認識した概念の」月を知ることは大きな隔たりがある。実際に観測者が月を観測しているときは、月の現前という現象を知覚空間において知覚しているのであるが、それは知覚空間においてであるがゆえに媒体の光やそれを見ている自分という表象は意識に上らない。上に述べた状況は、知覚が認識者の認識空間に変換されて初めて認識空間に図式化された世界となる。そこでは速度や物理的空間の概念が使用可能になる。情報が先験的に実在するものであるとか物理的実体であると規定すべきではなく、認識空間において構成された概念とみるべきである。このように情報の概念には、伝搬の性質を求めることで必然的に発信者と受信者の概念も同時に付随していると考えらるべきであろう。したがって他者や外部の概念も必然的に潜在している。まさに実体論的な視点からパースペクティブ（遠近法）な視点へと転換しなければならない。

情報の概念が昨今のように巷に溢れるに至った原因の一つは、この情報の伝搬性が社会に多大な影響を与えたことによるものであろう。すなわち、テクノロジーの進展によって物理的側面である情報の伝搬の速度と情報の容量が飛躍的に増大したことが、社会の仕組みの変化をもたらすことになったと考えることが出来る。このように情報は、全く新しい概念というわけではなく、もともと認識の根元にあったものが情報の特性の一つである伝搬という側面に技術の飛躍があり、その高速性と容量の増大化によって、社会に大きな変化をもたらしたものである。伝搬には伝搬する媒体とそれが受容される空間概念が潜んでいる。その空間は発信者と媒体と観測者を隔てている。更に伝搬には時間概念、したがって速度の概念も潜んでいる。したがって、世界の意味を身体論的に取り込もうとするとときに情報の概念がうまれるのだと云えよう<sup>3)</sup>。

情報は「コト」的なものであるか、「モノ」的なものであるかという議論があるが、情報という意味は自然言語的意味理解として受け入れなければならないのであって、意味理解は自然科学の対象ではない。自然科学は、自然自体の説明と云うよりも、認識空間に作り上げられた概念の世界の説明の理論であって、自然科学が情報と関わるのは、意味の表現形式と伝達の方法についてである。「コト」か「モノ」かという問いかけは、情報という概念の違った局面に対する別々の問いかけであり、情報をどちらかに決定することは本来無意味なことである。情報は意味内容と伝搬の二つを合わせたものとして捉えるべきものである。すなわち認識空間において認識がなされるとき、認識させるものと、認識されたものの両義性として、コトとモノの両者を同時に併せ持つものであるとみることである。ただし、ここでいう「モノ」は、認識空間に設定された概念としてのモノであり、素朴な実在物ではなく、自然科学という認識空間につくられた一つの認識世界に登場するモノである。たとえば、素粒子なども、そのような「モノ」であるといえよう。我々はこのような

科学の空間に設定されたモノに意味を付与し、時にはその意味を自然言語として言語化したり、映像化する。例えば、受信者が受信したものをドットの系列という「モノ」として認識したものを、記号（文字）として了解し、それを再度自然言語に翻訳する事によって情報が生成される。リングという文字列であれば、それをリングという文字として了解し、その文字の意味としてリングという意味を了解する。そのとき伝えられたものとして了解した意味が情報なのである。この例の場合は、記号としての認識から意味の認識へと認識の変換がなされている。

このような観点を考慮して、情報の概念を、たんなる意味内容やパターンのような実体としてのゲシュタルトではなく、意識空間において、伝搬された概念の意味内容として、以下のように定義しよう。はからずも、情報という漢字が、意味内容を意味する「情」と伝達を意味する「報」からなっていることに呼応していて、ここにも通常の「物」は含まれていない。

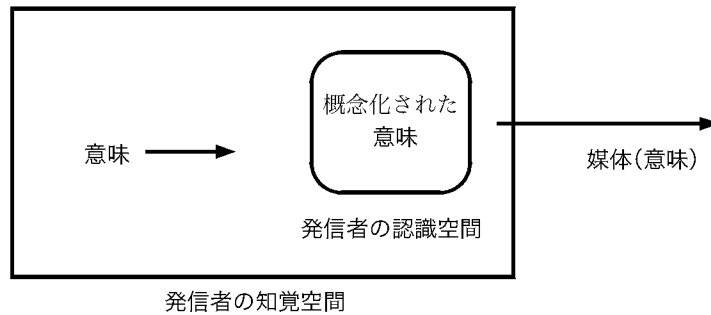
我々はまず、受信された情報を定義する。受信された情報（受信情報）とは、受信者が認識したものを、他者から発信され伝達されたものと見なして認識空間において認識した意味内容のことである。発信者が想定される場合は、発信者によって生み出された意味表現を受信者が、他者から発信された意味表現と見なして認識した意味内容のことである。発信された情報の意味は受信者によって受信されて初めて受信者の中に発露する。そして受信は必ずや、発信者の存在を前提にしている。「情報とはパターンである」と云う定義は、情報が認識者の外に存在する他者であると見なすことであるが、我々の定義では認識空間に形成された認識を、外部から伝搬された意味表現として認識空間において再認識する事によって生じる概念となる。

一方、発信された情報（発信情報）とは、発信者が他者に伝えようとした意味内容を、選び取った媒体の属性として付随させて発信した媒体である。それが発信者にとっての発信された情報である。それが受信者によって解読されたとき、初めて受信者から見た発信情報となる。解読される前は発信された媒体に過ぎない。

情報を他者に向けて発信するには情報を表現するための音声や電子メールやキャンパス等の物理的な媒体（メディア）の選択が必要である。媒体に込められた意味は受信者に受信され解読されて初めて意味が再現される。ひとたび発信者において情報の発露がなされ、発信の意図のもとに発信手段が選定され、それが他者に送信されても、受信者によって受信者の認識空間において選取られた表現の意味は、受信者の意識の中に新たに意味を生むので、その発信者が選択した（つमりの）意味と、受信者が知覚した意味と同じであるかどうかは別の問題である。受信情報の意味と発信情報の意味が同等である保証はない。一致しているかどうかの保証は経験的な保証であり、ほぼ一致していると連带的に（共同主観的に）了解されるに過ぎない。それはあくまでも了解なのである。これはテキストに多義性が生まれることと同じ状況である。受信者にとって受け取ったものはテキストであるほかはない。

我々のこのような受信された情報と発信された情報の定義は、どちらの情報も客体として存在するものにはなっていないことを強調しよう。

発信情報の概念図

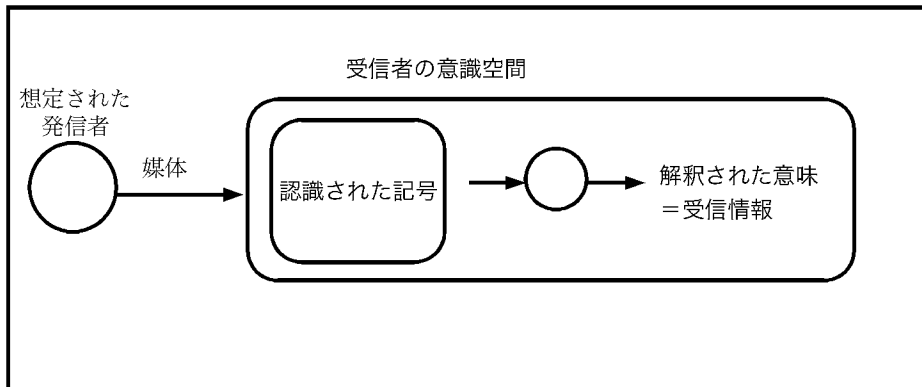


知覚空間に派生した意味が発信者の認識空間において概念化され、それが伝達媒体に変換され発信される。

図 2-1

発信情報の概念図

受信者の知覚空間



受信者の意識空間に想定された発信者から発信された伝達媒体を知覚したものを記号として認識し、その意味認識がなされる。

図 2-2

## 2.2 情報の生成と発信

他者への情報の伝達の意図に基づき、発信者は通常、情報の表現メディアの選定（言語、イメージ、音声、等）を行う。それをなし得るには、メディアについての予備知識が必要であり、一定程度の習熟が要求される。成熟した社会では学校教育の場でその教育がなされる。またメディアを表現する物理的道具についても知識が要求される。書き言葉であれば鉛筆、ペン、毛筆などの文字の筆記器具についての知識、音楽ならば楽器など、話し言葉であれば言語やイントネーションの訓練が必要であり、イメージであれば、画材やカメ

ラについての知識と習熟が必要である。パソコンを道具とすれば、そのリテラシーに習熟しなければならない。また、受信者を想定して情報の発信がなされる場合は、受信者の特性、(例えば、受信者の欲求、年齢や国籍など)を踏まえる必要がある。

発信者にとって、以上のようなメディアや受信者についての準備がなされていても、それ以前に考えるべき大きな問題が横たわっている。

情報発信者は自らの中に発信すべき情報(意味表現)をどのように獲得したのであるか。文字で情報を伝える場合には、送るべき文章をつくりあげなければならないが、その文章は発信者の脳裏に、どのようなプロセスで生まれるのであろうか。画像で発信する場合にも、その画像はどのようにして描かれるのだろうか。そのコンテンツの創造はどのようにして可能なのであろうかという問題である。一つの文学作品を生み出すこと、一枚のタブローを描き上げること、これらは全て創造の行為である。通常、創造はこの世に存在しなかったものを新たに存在たらしめる行為であるとされる。しかし無から有を生み出すことは可能であらうか。「情報はパターンである」という情報の定義に従うとしたら、そのようなパターンは誰がどのようにして生み出したものと考えべきだろうか。自然科学の分野では、自然現象の中に、観察によってパターンが見いだされるという図式が描かれる事が多い。あたかもパターンが、自然界の中に一つの客観物として既存であるかのように。しかしそのようなパターンの生成を考えることは、物理学の研究目的なのであって、科学の枠の中で、原因結果の無限の連鎖として科学的循環論法に陥るのである。これはまさにゲシュタルト学説の欠陥である。情報をこのようなパターン=ゲシュタルトとして捉えたとすれば、たとえば、小説は文字の一つの配列のパターンであると見なすことが出来るが、しかしその配列は如何にして生まれたのかを説明することは出来ない。既に小説家(発信者)の頭の中に文字系列として既存であったというのであろうか。画家の頭脳の中に当初から絵のイメージが完成してあって、画家はキャンバスにそれをたんに再現したに過ぎないのであろうか。ともかく、発信者は、伝達したい意味表現が、「望み通り」に表現され、伝達されているかどうか、常に自分が生み出す情報の表現に対峙せざるを得ないのである。

この創造の根源的な問題は、様々な情報の飛び交う現代にあって情報の発信者の側にも、様々な現実的問題を投げかける。

芸術家であれば、作品創造に苦闘し、製品の広告をつくる者は、コマーシャルの効果の程を事前に吟味しなければならない。政治家にあっては、多くの人々の様々な欲求を前にして、どのような政策を生み出すべきかが大きな問題になる。これらの決断は論理的帰結ではあり得ず、説明はあり得ても、決断である他はない。しかも、意識が、全ての存在者の〈われわれにとって存在するものの〉意味や価値をそこから初めて受け取る源泉であり、したがっておよそ一切の存在者の相関者となるべきものであるから、発信者に生じる意味内容は、発信者のおかれた社会環境からも無縁ではあり得ない。したがって発信者の意味内容は、発信者個人を越えて社会環境等との輻輳した関係を内在するものであり、完全に孤立した発信者が個人的につくりあげた情報とは云えない。発信者が自分の欲するところのもの、または発信したいと望むものは、したがって全存在の中にあって選び取るべきもの、或いは選び取られたものである。つまり一つの意志決定である。発信がなされる背後には、意識的であらうと、無意識的であらうと決断という主体性の問題が潜んでいる。(参考文献21 p. 95参照)

情報はこれまで述べたように、媒体の認識に付随する意味内容であるから、発信者の伝えようとする意味内容は、発信内容が決定（概念化）された後も、情報伝達のためのどのような媒体に如何に乗せるかが問題になる。この問題は理論と現実を繋ぐ問題であり、ここにも哲学的なあるいは経験的な共同主観的技術の問題が横たわっている<sup>20)</sup>。発信者の意図が意味表現に適切に盛られていなければ、十分な情報伝達がなされないばかりか、受信者側に様々な「誤解」や弊害を招く可能性もある。意味内容を媒体に乗せることは技術の問題であるので、各発信にはそれぞれ固有の技術的問題が伴っていて、それらの各論がそれぞれに存在する。このような情報発信に伴う技術の問題や社会制度との関係については別の章で後述する。

### 受信された情報

受信されたものを情報として読み解くのは、知覚の部分空間である認識空間に生じた概念を操作する事である。受信した記号をどう読み解くか、また送信された情報の意味内容を再現しようとする試みは、概念で世界を切り取る認識行為そのものであり、発信者に生じた意味内容を正しく読み解こうとすることは基本的には無意味である。受信された情報は最早、発信者の意味内容ではなくテキストであるからである。したがって受信されたものを情報として読み解くのは、発信者との協同連帯（共同主観）を如何に獲得するかという行為である。

## 2.3 情報システム

これまで述べてきたように、情報は発信者と受信者の存在が前提になっているが、この両者は結ばれて一つの情報システムを形成する。このようなシステムは様々な観点から分類する事が出来る。まず発信者と受信者が同一人である場合がある。たとえば、画家がタブローを制作する過程では、必ずしも自分以外の受信者の存在は意識されず、どちらかと言えば自分を受信者として想定していると云えよう。しかも、発信すべき内容は潜在的な形態で画家の内にあり、制作過程の中で少しずつ時間経過の中でその内容が形成されていく。このとき、使用する道具として各種の色の絵の具や、絵筆や溶き油の種類も量も、発信すべき内容と複雑に関係しながら選択される。その過程の中で、画家は発信者になったり受信者になったり、立場が入れ替わる。この過程は同一人の間の情報伝達と見る事が出来る。さらにまた、完成した作品が誰か他人の目に留まったとき、その者を受信者として制作者の意図した意味内容が伝達され、ここでまた新たな情報伝達がなされたことになる。同様に、コンピュータを前にして、ワープロソフトを用いて文章を作成する行為も、制作者が発信者と受信者の立場を交互に繰り返すものになっている。完成した文章を送り先に送信する段になって、送り先が決定されたとき、新たな受信者が想定され、また新たな情報伝達が生ずることになる。このように単一の発信者と受信者を兼ねたシステムでも、一つのシステムと見ることも出来るし、複数のシステムの結合したシステムとも見る事が出来る。一つの送信者と複数の受信者の例としては、或る特定のテレビ会社とその視聴者の例が挙げられる。また、複数のテレビ会社とそれを選択的に受信するシステムも考えられる。受信者が置換的に変動する例である。ここでこのような分類を完全に遂行することはないが、情報システムの構造が社会構造に与える影響は研究に十分に値するであろう。

## 2.4 情報科学

前節で我々は、情報を認識空間の中で構成された物理的世界の中で伝達されるべき自然言語的意味内容と定義した。したがってここで云う意味内容は、言語や記号や概念の姿をして立ち現れる。これらのものは、物理的「モノ」と対応され、数理的処理が可能になる。上で定義した意味での情報のコトとモノの二面性は、一方ではセマンティックスとしていわゆる「文系」の学問に関係し、もう一方でシンタックスは機械論理として「理系」の学問に関係してくる。セマンティックスとしての情報は、既存の記号論や言語学としてすでに既存の学問としてあり、情報の学問として位置づける必要性は感じられない。社会学や経営学などと情報との関係は、情報のモノとしての「伝達速度」や「容量」と社会の関係であり、いわゆる「技術と社会」の問題である。

一方、セマンティックスとシンタックスとは相補的な関係にあり、特にそれはコンピュータに関してはソフトの問題＝アルゴリズムの問題として出現する。各個の具体的問題については後述する。

(続く)

## 参考文献

- 1) イマヌエル・カント『純粋理性批判』(篠田英雄訳、岩波文庫 上, 中, 下)
- 2) ハイデッカー『存在と時間』(桑本務訳、岩波文庫 上, 中, 下)
- 3) 市川浩『身体現象学』(河出書房新社)
- 4) ミッシェル・セール『五感——混合体の哲学』(米山新能訳、法政大学出版局)
- 5) 池田清彦『構造主義科学の冒険』(毎日新聞社)
- 6) リチャード・ローティ『哲学と自然の鏡』(野家啓一ほか訳、産業図書)
- 7) 竹田青嗣『現代思想の冒険』(毎日新聞社)
- 8) 梶山雄一、上山春平『空の論理〈中観〉』(角川文庫)
- 9) 下条信輔『〈意識〉とは何だろうか』(講談社新書)
- 10) 『哲学の最前線』(講談社新書)
- 11) ヘーゲル『歴史哲学講義』(長谷川宏訳、岩波文庫 上, 下)
- 12) デカルト『方法序説』(谷川多佳子訳、岩波文庫)
- 13) 小坂修平ほか『現代思想・入門』(J-CC 出版)
- 14) 竹田青嗣『意味とエロス』(作品社)
- 15) 竹田青嗣『現象学入門』(NHK ブックス)
- 16) 松岡正剛 監修『情報文化問題集』(NTT 出版)
- 17) 今村仁司 編『現代思想を読む辞典』(講談社現代新書)
- 18) 坂井利之 編『情報科学の基礎研究』(オーム社)
- 19) 吉田民人『自己組織性の情報科学』(新耀社)
- 20) 小和田正『測定の問題(III)』『名古屋工業大学紀要』第51巻
- 21) 小和田正『情報の概念について (1)』『椋山女学園大学研究論集』(人文科学篇) 第32号
- 22) メルロ・ポンティ『人間の科学と現象学』(木田元ほか訳、みすず書房)
- 23) 鷲田清一『メルロ=ポンティ』(講談社)
- 24) 広松渉『科学の危機と認識論』(紀伊国屋書店)